

被爆者の証言に
関心集まる

ロシアのウクライナ侵攻もあって被爆者の証言に改めて注目が寄せられています。

江別原水協の皆さんが会館
を訪問しました

江別原水協は「若い人たちが二度と被爆者にさせない。危険な道に踏み込ませない。そのためにも今一度ノーモア・ヒバクシャ会館を訪れて、被爆者のお話しを聞き、被爆の実相を見つめなおして、江別の原水爆禁止運動を発展させよう」と考えて、11月18日に15名の方が会館を訪ねました。

被爆者の金子廣子さんから、「5歳の時に広島で被爆、大した外傷はなかったようですが、その後25歳過ぎから被爆放射線の後遺症で頭痛、甲状腺など次から次と後遺症に悩まされ続けている苦しみ」と「被爆者だとの差別」の体験を話していたいただきました。また、事務局次長北明邦雄さんから「会館建設の由来や「被爆二世プラスの会」で被爆者が高齢で亡くなった後の被爆体験や核廃



絶への思いをつたえていることなどを伺い、この大切な遺産を必死で守り育てる努力に敬意を感じました。

参加したKさんの感想を紹介します。

「原爆資料館が広島・長崎以外、札幌にあったことをこの度知りました。また、「5000円のレンガ」のキャンパなどの市民運動によって建てられた資料館は、なくしてはいけない貴重な財産だと思いました。資料館では被爆のビデオや写真・文書・書籍の展示の他、広島で5

歳の時に被爆された金子廣子さんが、原爆で家族を亡くしただけでなく、ご自身の身体の神経や骨にまで被爆し、さらに甲状腺低下症で今なお心身ともに苦しんでいることを話されました。原爆は使われてはいけなしいし、作られてもいけないし、早くなくしてほしいです。そのためにも日本政府が国連の「核兵器禁止条約」を早期に批准してほしいです。そのため私も原水協の活動に参加していきま

す。」(江別原水協ニュース)2022年12月1日号より、「感想」を除き一部要約)

高校生たち若い世代も積極的に

高校生たち若い世代の動きも活発です。

12月7日、高校生平和大使の活動をしている札幌日大高校の生徒3名が会館を訪れ、松本さん・宮本さんの話に耳を傾けました。以下は当時参加した飯川璃樹くんの感想です。

「昨年12月7日、私たち札幌日本大学高等学校の生徒3名はノーモア・ヒバクシャ会館を訪れた。「平和」に関する探究学習の一環である。グループご



とにテーマを決めて発表するというものであり、私たちのグループは「核兵器」をテーマに選んだ。選んだ理由のひとつは私自身の立場にある。これを読んでいる皆様方にとって、高校生平和大使の存在は馴染み深いものであると思う。私は現在高校1年生であるが、北海道高校生平和大使と共に活動し、長崎研修へ派遣される「長崎派遣者」という役割をいただけて活動している。昨年、高校生平和大使としては、署名活動はもちろんのこと、広島、長崎、東京での研修、更には北海道高校生平和大使派遣10周年記念事業

として「被爆ピアノコンサート」を開催した。私はそのいくつかに参加させていただき、多くの出会いや学びを通じて核や平和に対する意思が強くなったと心から実感している。

そのような背景のもと今回のテーマを選び、その一環としてノーモア・ヒバクシャ会館を訪問させていただいた。会館の方々は私たちが暖かく迎えてくださり本当にありがたかった。当日会館には広島で被爆された方と長崎で被爆された方がいらし、お二人の被爆体験とそこから北海道へ来られた経緯を伺った。当時のお話は本当に生々しく心が痛くなった。今年である日から78年が経つ。今もなお、核兵器を廻って世界中で騒がれているが、いかなる事情があろうとも核兵器は廃絶すべきだと私は思う。私が大人になる頃にはこうしてお話を聞ける被爆者の方はどれほどいるのだろうか。被爆者と直接話すことが出来る最後の世代として何が出来るのか、よく考えて行動しなければならぬと改めて感じる貴重な経験となった。(4ページへ続く)